

# 嫌われた子規選集

## ― 白石南竹編『俳人子規』の顛末 ―

復本 一郎

俳句の革新を<sup>な</sup>為し遂げた正岡子規が数え年三十六歳で没したのは、明治三十五年（一九〇二）九月十九日のことである。

没後直ぐの明治三十五年（一九〇二）十月十三日に吉川弘文館より小谷保太郎の編輯で『子規隨筆』が出版されている（架蔵の明治四十年七月二十日刊の七版奥付による）。この本は子規の隨筆「墨汁一滴」「病牀六尺」「春色秋光」を一本にまとめたもの。妹律の名で香奠返しとて用いられたものでもある。小谷保太郎については、生没年等一切不詳。吉川弘文館サイドの人間か。十二月五日には、同じ小谷保太郎の編輯で『子規隨筆続編』（吉川弘文館）が出版されている。「松蘿玉液」「文界八つあたり」「文界漫言」「養痾雜記」「樺三昧」「三十棒」「従軍記事」「戲曲歌と四季」「歌よみに与ふる書」「人々に答ふ」「歌話」「曙覧の歌」「短歌愚考」を収めている。中村不折の画がふんだんに鏤められていて、楽しい一本である。この前、すなわち、明治三十五年（一九〇二）十一月十五

日には、子規の漢詩、和歌、新体詩、叙事文論、紀行文、隨筆等を巻初に、各新聞、雜誌の追悼記事、各氏の追悼文等を収録した『子規言行録』（吉川弘文館）が出版されている。これの編輯に当たっているのも小谷保太郎である。

この『子規隨筆』『子規隨筆続編』『子規言行録』が、いわば子規サイドの人々によって積極的に出版された没年時（没後）の出版物ということになる。

この三冊に対して、明治三十五年（一九〇二）にもう一冊の子規関係の著作が出版されている。そして、私が小稿で注目しようとしているのは、実は、この本なのである。

書名を『俳人子規』という。「白石南竹編」となっている。判型は、A5判。全百八十三ページ。

開巻すぐに、子規自筆の原寸大の俳句短冊、それに、子規句を添えての肖像画のページがあり、以下目次、本文へと続く、子規選集。子規最初の個人選集である。

内容を見る前に、まずは、架蔵本によって奥付の記載から検討しておくことにする。

「明治三十五年十一月十日印刷、明治三十五年十一月二十日発行」となっている。『子規言行録』に遅れること五日、という非常にはやい時期に出版された個人選集ということになる。ただし、発行日について注意すべき点がある。「明治三十五年十一月二十日発行」なのであるが、「二十日」の部分、貼紙<sup>はりがみ</sup>による訂正が施されているのである。貼紙の下は、「十五日」となっている。十一月十五日は、先に見たように『子規言行録』の発行日である。この点に留意しておいていただきたい。印刷・発行日の下に「俳人子規 定価金四拾銭」と記されている。ちなみに架蔵の『子規隨筆』七版（明治四十年）の定価は、六十銭、『子規隨筆続編』の定価も同じく六十銭、『子規言行録』の定価は五十銭である。ページ数との関係から言って、当時の俳書としての標準的な価格ということかと思われる。天どんが八銭の時代である。次に「編輯者 白石南竹」とある。俳人南竹については、目下のところ生没年等、詳かにし得ない。手もとにある明治四十一年（一九〇八）八月刊『俳人名簿』（俳書堂）には記載がない。白田三雅編（曾我部松亭の稿がもとになっている）『伊予俳人録』（青葉図書、平成十年四月刊）を繙くと、わずかに、

南竹 松山市枝松 白石栄吉、松風会員

と見えるのみである。大塚毅編著『明治大正俳句史大事典』（世界文庫、昭和四十六年九月刊）の大冊を繙いても、明治二十七年（一八九四）三月の「松風会」の項に松風のメンバーの一人としての白石南竹の名前が見えるに過ぎない。「松風会」は、新俳句サイドの最初の結社。明治二十七年（一八九四）三月の発足時には下村牛伴（為山）が指導に当たっていたが、翌明治二十八年（一八九五）には松山で保養中の子規が指導、夏目漱石もメンバーに加わった。「子規の唱導する新俳句の旗は、まず、その郷里松山に揚げられた」（『明治大正俳句史大事典』）のである。今日、南竹についてもっとも詳しく知り得るのは、和田茂樹著『子規・漱石と松風会』（松山市観光課、昭和四十四年一月刊）。それによって南竹句を左に列挙してみ。濁点を私に付す。

羅馬府の昔しを語れ秋の風

夕立のとりつきかねてふじの山

あかくとはげ山暮れて薄かな

酒くらに灰吹かけし野わきかな

大灘や野分の中の異国船

もう一句。これは柳原極堂著『友人子規』（前田出版社、昭和十八年二月刊）の中に見える。

昭和十八年二月刊）の中に見える。

十月十七日君が離別の宴を張る

これは、子規の帰京に当って、明治二十八年（一八九五）十月十七日に松山二番町の料亭花廬舎で行われた送別会での南竹の一句である。極堂は、南竹の言葉「私は送別句をいろいろ考へて見たが終に出来なかつたので、已むを得ず事実其儘を句にして聊か責をふさいだのであつたが、それが今日有用な資料となつたとは実に意外の仕合である」を紹介している（送別の宴が十月十七日であつたことが南竹句によって明らかになつたことに對するコメント）。送別会に集つた松風会のメンバーは十八名。子規はメンバーの雅号（俳号）を詠み込んだ句を座興に作っているが、南竹を詠み込んだ句は、

竹の窓南に秋の山近し

であつた。ここで念のため『俳文学大辞典』（角川書店、平成七年十月刊）を繙いたところ、「白石南竹」の項があり、森元四郎氏が執筆している。右の私の記述を補う意味で、そのまま引き写しておく。

白石南竹 はんちく 俳人。生没年未詳。明治二十七年（一八九四）、下村牛伴（下村為山）の正岡子規あて書簡に「二七、八歳」とある。伊予国（愛媛県）松山生まれ。本名、榮吉。松山高等小学校教員。松風会発足当初のメンバー。子規没直後の明治三五年一月、『俳人子規』を出版。句「あしの芽に魚のかたまる日和かな」

以上、おぼろげながらも、『俳人子規』の編輯者南竹が浮び上つてきた。特に明治二十八年（一八九五）の子規の帰郷中には、子規との親しい交流があつたことが知られる。あるいは子規と同年か。

奥付は次に「発行者 林平次郎 東京市日本橋区通三丁目六番地」「印刷者 櫻井莊吉 東京市京橋区柳町五番地」を記し、最後に「発行所 東京市日本橋区通三丁目 六合館」「同 東京市京橋区南伝馬町一丁目 弘文館」となっている。「六合館」と「弘文館」の共同出版というかたちをとっているのである。鈴木徹造著『出版人物事典』（出版ニュース社、平成八年十月刊）によれば、「六合館」は、明治初年に設立され、欧米の原書を翻訳発行していた出版社。明治二十七年（一八九四）に『俳人子規』の発行者である林平次郎（文久元年～昭和六年）の手に渡り、本格的な出版活動を開始したようである。大槻文彦『言海』も「六合館」。林平次郎は、若い頃、吉川弘文館で修行している。「弘文館」は「吉川弘文館」に同じ。『俳人子規』出版当時の明治三十五年（一九〇二）における代表者は、創業者である吉川半七。南竹編輯の『俳人子規』は、「六合館」の林平次郎が積極的に出版にかかわり、林の修行先である「弘文館（吉川弘文館）」の吉川半七が後見人的な役割を果たしたということなのではなからうか。「弘文館（吉川弘文館）」がからんでいた

のでは、同社から出た『子規言行録』と『俳人子規』を同日に発行するわけにもいきまい。『俳人子規』の発行日「明治三十五年十一月十五日」を貼紙<sup>はがき</sup>によって「十一月二十日」と訂正した謎が解けたように思われる。林平次郎の吉川半七に対する（もちろん子規サイドの人々に目配りしつつの）配慮であろう。

次に『俳人子規』の内容を概観してみよう。まず先に触れた挟み込みのカラー実物大俳句短冊の複製と肖像画の写真ページについて見てみる。短冊は上部が青色の雲形、下部が紫色の雲形<sup>うつくもり</sup>の打曇。俳句は、

つばみ太く開かぬを愛す福寿草 子規

の一句が、「つばみ太く開かぬを」「愛す 福寿草」と二行に書かれている。自筆の『俳句稿』の明治三十三年（一九〇〇）「新年の部」の箇所へ「蒼太く開かぬを愛す福寿草」の表記で見える。明治三十一年（一八九八）一月三日の新聞「日本」に発表された句。写真ページの子規の肖像画は、蝶ネクタイ背広姿で、髪を伸ばし、八の字髭を生やしている。その肖像画の右横に二行で、

秋風やわれに神なし仏なし 規

の自筆の子規句が掲出されている。管見の範囲ではこの句、他に所見がない。肖像画と句とは、合成であろう。短冊と肖像画について、南竹は、肖像画の裏のページ下部に左のごとく記している。

一 本書の短冊は往ぬる明治二十七年子規氏の郷里に養病せられたときの真筆なり。

一 肖像画は子規氏の郷里の海南新聞に掲げたるものにしてもつとも真に逼る<sup>せま</sup>を見る。

十一月十三日 南竹しるす

肖像画の右横の「秋風や」の句については言及されていない。この解説、少々おかしい。すでに見てきたように、子規が「養病」のため故郷松山に帰ったのは明治二十八年（一八九五）。また、「つばみ太く」を新聞「日本」に発表したのは、明治三十一年（一八九八）のこと。「明治二十七年」が南竹の記憶違いであるとして、明治二十八年（一八九五）にはすでに一句が作られていたということなのであろうか。仮に明治二十八年（一八九五）の作として、三年も前の旧作を新聞に発表するであらうか。疑問は尽きない。「真筆」説にまでも疑義が生じてくる。一方、「秋風や」句の真贋は、如何であらうか。これまた疑問。

『俳人子規』全体の構成を目次によって見ることにする。左のごとくである。

俳人子規目次

- 一 はしがき
- 一 子規の家系および小伝
- 一 俳句作者としての子規

- 一 俳句学者としての子規
- 一 和歌界に於ける竹の里人
- 一 子規の病患と其文章
- 一 子規俳句集

春 四百十句

夏 三百八十句

秋 三百四十句

冬 二百十句

次に「はしがき」を掲出してみる。

明治の芭蕉なり蕪村なりと謠はれたる新俳諧の開祖、正岡子規氏は僅に三十六歳を一期として上根岸の草庵に眠りぬ。

氏の俳諧を研究するや十数年其間珍羞（筆者注・珍しくてもしろい食物）瑤台（筆者注・立派な高殿）の榮華を捨て政海官地の虚名を避け商工錙銖（筆者注・物事の微細なこと）の營利を惡み伉儷（筆者注・夫婦）鴛鴦の楽を絶ち火雲の空白雪の夜を物ともせず孜々（筆者注・ことごとく）として帝国、大学両図書館に就き或は知人の蔵書を借り古今の俳句を分類記録するもの身長に三倍し或は俳書を著はし俳句を正し、こと居常一日の如く毫も倦怠することを知らざりき。氏句あり。

衣かへて机に向ふ写し物

和歌にやせ俳句にやせて夏男

是非もなや足を蚊のさす写し物

や、寒み机に向ふ背くぐまり

と又以て其の専攻の一端を窺うべし。氏亦病牀讀書日記あり。人若し之を繙かば沈痾宿疾刻々に其勢を逞くし身衰へ力尽き吹かば飛ぶべき彼が泰然又自若。達読し善談し健児をして後に睦若（筆者注・相手のすばらしさにただ目を見張ること）たらしめ剛毅の氣力がいかに死の大勢力と相搏ち相戦ふて毫も屈せざりしかを見るべし。

然れども生は待たず無常一陣の魔風は終に不屈不撓の健児を倒しぬ。悲しかな。

共に見し月になしむ身になりぬ

諺に棺の蓋をおほふて論定まると氏の真価は如何。

これ俳諧史上の疑問なり。

余不肖といへども氏に従うて俳諧を学ぶ八年其の間氏の俳諧和歌及び文章を随記せしもの積んで一小冊子をなす。今其の訃音に接し之を分類批評して世に公にす。同道の士若し本書によりて氏が俳壇に於ける功績の一端を知らるゝあらば幸甚。

「はしがき」の前半は子規讃歌、後半は本書（『俳人子規』出版に至るいきさつが記されている。ただし、確かに子規讃歌ではあるものの「諺に棺の蓋をおほふて論定まると氏の真価は如何。これ俳諧史上の疑問なり」と結

んでいるところなど、例えば『子規言行録』に見える他の門人、あるいは諸家の言と比べてどこか醒めている。

正直と言えば正直なのであるが、その他人行儀な眼がいささか気にならないこともない。それはともかく、注目しておいていいのは後半部であろう。まず「余不肖とい

へども氏に従うて俳諧を学ぶ八年」と言っている。松風会のメンバーの一人として子規に対面したのが、すでに何回も言っているように明治二十八年（一八九五）九月、子規が没したのが明治三十五年（一九〇二）九月。南竹が言うように足掛け八年ということになる。ただし、この間、「ほとゝぎす」（ホトトギス）への投稿、寄稿の形跡がないのも不思議である。南竹宛の子規書簡も、子規宛の南竹書簡も伝わっていない。その限りでは、親炙といった印象は希薄なのである。が、南竹は「其の間氏の俳諧和歌及び文章を随記せしもの積んで一小冊子を作す。今其の訃音に接し之を分類批評して世に公にす」と記している。「随記」は、「随聞」に倣っての言葉で、親しく接して記したとの意であろう。この表現も実際との間にいささか矛盾があるように思われる。が『俳人子規』は、南竹自身がこのように言っているようにあくまでも子規作品の選集であり、南竹は編輯者の位置に甘んじて、作品に対するコメントも最小限にとどめている。その点では、子規全集の完備している今日、『俳人子規』に見る

べきものはほとんどない。わずかに最初の子規選集として、子規享受史中に記される一書ということにならざるを得ない内容である。その可否はともかく、南竹自身の見解が詳細に聞けたならば、本書は後代、もっともっと注目されていたように思われる。

『俳人子規』は、先に示した目次でも明らかのように、和歌、文章の紹介にも及んでいるが、南竹が最も力を入れたのは、書名に明らかにされているように、子規の「俳人」としての側面。和歌、文章に関しては、ごくごく大雑把な紹介に終始している。それでは、「俳句作者としての子規」「俳句学者としての子規」の章が充実しているかという点、これがまた、今日の我々を満足させてくれるものにはなり得ていない。「俳句作者としての子規」の章は、子規俳句の多様性を「艶麗体の句」より「滑稽体の句」まで全部で二十体に分類し、それぞれ例句を掲出し、その中の数句に対し、ごくごく簡単なコメントを付した内容であるが、この分類が南竹のオリジナルなものではなく、明治二十九年（一八九六）に子規自身が新聞「日本」紙上においてすでに試みた分類法をそのまま踏襲したに過ぎない安易なものなのである。中で先に言及した肖像画の横に記されていた句へ秋風やわれに神なし仏なしについて触れている文章があるので、少々長くなるが、左に示してみる。この句が本当に子規の作品である

ならば、今まで知られていなかった子規の句ということになり、どうしようもなく陳腐な作品がらも、病臥の子規から生まれたことを思うならば、やはり注目しておく必要はあろう。「主観体の句」の冒頭において触れられている。

### 秋風や我に神なし仏なし

此句を表向より解するときには如何にも平淡の句の如し神も仏もなしとは何人も口にする処にして殆んど常套語なり。ただこれを秋風といふ悽楚(筆者注・非常に悲しいと感じること)の名詞に排結(筆者注・結び結ぶの意の南竹の造語か)したる点はよく調和を得てしまりのつきたる句なりと感ずるのみならされど余は之を読みさまぐに想像したる結果は涙をながしつつこの句の解釈をなしたり。ああ子規不治の病に罹り絶望の域にありしとき行秋の天地風死して夕まぐれの光景何となく物淋しき時既に八分までも枯れ果たる病体を根岸貧居の四畳半に横たへ現在過去未来の事柄を主観的に観ぜし時百鬼腦を襲ひ幻想百出心つかれ体なへ心細く思ひ悔しく感じ呼吸せまるが如く現ともなく夢ともなく到底其死の旦夕に逼りしを推定し不快は益高まり来たり燎悶(筆者注・火のごとき苦しみの意の南竹の造語か)の極、感慨の血は沸きて殆んど狂態に陥りし一瞬間一刹那彼の唇

を破てこの句を吐きしならん。要するに主観体の句は客観を描き尽さずして観る者の想像に任するにあり造句宜しくこれに習ふべし。

一句が真実子規の作品であるならば、南竹の激越な口調が理解できなくもない。この句に続けて南竹は「主観体の句」としての子規句を五句例示しているが、それらはいずれも子規自身が「主観体」として明治二十九年(一八九六)三月二十二日付の新聞「日本」に掲出した全十二句中のものである。ちなみに子規自身は「主観体」を「主観体は天然と人事とに關らず作者の意思感情を現はしたるを言ふ。作者の知識によりてある物の關係を定め是非を判じたるが如きも主観体なり。他の心中を推し測りたるも亦た然り」(句点筆者)と説明している。南竹の「主観体の句は客観を描き尽さずして観る者の想像に任するにあり」との見解との間に少しく逕庭があるように思われる。

「俳句学者としての子規」の章は、子規の俳論書の解題であり、見るべきものはない。

ということ、で、『俳人子規』一卷で最も評価し得る章は、巻末の「子規俳句集」であろう。子規句千三百余句が四季別、季題別に分類されている。「夏帽」「クリスマス」等の新季題にも目配りが利いている。子規句集としては、子規生前、明治三十五年(一九〇二)四月に子規自身の

選句による『賴祭書屋俳句帖抄 上巻』（俳書堂）が公刊されている。明治二十五年（一八九二）より二十九年（一九〇六）に至る全七百四十五句を年代別、四季別、季題別に配列したものである。対する『俳人子規』中の「子規俳句集」は、第三者による公刊された最初の子規句の選句集として、大いに注目されてよいであろう。句数においても『賴祭書屋俳句帖抄 上巻』を倍近く上回っているのである。『俳人子規』が評価されるべきであるとするれば、いちはやく「子規俳句集」を編んで巻末に付したこの点であろう。これによって人々（一般読者）は、『賴祭書屋俳句帖抄 上巻』以上の句数の子規句を披見し得るようになったのである。なお、子規の俳句選集については、明治四十二年（一九〇九）二月二十四日に俳人瀬川疎山によって『子規句集』（三教書院発行、東京堂発売）が編まれ、公刊されている。四千句の選集。疎山は「俳人としての子規没後、其句集の刊行されぬを遺憾に思うて」の企てと述べている。子規七回忌を意識しての出版。

＊

右に見てきた白石南竹編の『俳人子規』であるが、この書、子規門四天王の一人河東碧梧桐から完膚なきまでに酷評されたのであった。これからその様子を見ていくことにする。俳誌「ホト、ギス」の明治三十五年（一九

〇二）十二月二十七日発行号（第六巻第四号）は、「子規居士百ヶ日忌」の追悼として『子規追悼集』と銘打たれている。その中に碧梧桐の小説「墓側」が載っている。大竜寺の子規の墓に詣でた碧梧桐が、墓中の子規と会話をし、それを墓の側の木の梢にある「烏瓜」が聞くという趣向である。実際に子規が碧梧桐に宛てて認めた書簡なども援用されており、事実在即した内容の小説となっていて、興味深い。その中に南竹の『俳人子規』について触れた部分が出てくるのである。少し長くなるが、大変面白い内容であるので、該当箇所を左に摘記してみることにする。子規の言葉からはじまる。

「ヒ、ヒ、それで思ひ出したが、俳人子規といふ本をお見たか、南竹どんなことを書いたかな。

「イヤまだ見ない。見るのがいやぢやから。

「まあ見たくないな。

「あれについて面白い話があるのよ。あれは何ぢやさうな、升のぼりさんのまだ初七日もすまないうちに、あの本をもつて往つて、金港堂へ売らうとしたのださうだ。あまり早過ぎるので、金港堂でも不審に思つてつき返したのぢやさうなが、其手紙の中に「子規先生に待して其教おしえを聞くこと前後八年」とか何とかいう勿体書きがあったとき。えらいもんだな。南海の南竹の本腕だらう。



「南海の南竹の謂れをおまい知つといでるのか。

「漱石君に初対面の挨拶をする時、私は南海の南竹ですと言ふたといふのぢやろがな。松山の奇談として虚子から聞いたのよ。

「どうも東京へ来たといふて、蜜柑の籠か何か持つて来たな、丁度お前も来ておいでとろう。アシの非常に苦しんだ日で、あの蜜柑が怪しいと思つたていあの時もういかんと見込んで早速原稿を書き出したのぢやな。人間もそれ位のことをやれば、慥にえらい一人ぢや。

「金港堂でつきかへされたから、其次は新声社へもつて往つたさうぢや。こゝでもつきかへした。新声社の話すところでは、別に何の評論もしてない。彼の俳句、彼の歌、彼の新体詩、彼の文章、彼の小説、など、いふ欄を置いて、それに日本新聞やホト、ギスやを切り張りしたものだ。

「馬鹿にしてるぢやないか。(下略)

最後の言葉、子規である。子規、碧梧桐と交互に会話が交<sup>か</sup>わされている。伊予弁が見事に再現されていて、同郷の私などなつかしさを禁じ得ない。子規という死者と、碧梧桐という実在の人物との会話が不思議な雰囲気<sup>か</sup>を醸し出している。碧梧桐は、死者である子規の気持を付度しつつ筆を執っているのであるが、かなりの部分が事実

を押えてのものであるので、説得力があり、読者は二人の会話に引き込まれることになる。

一読明らかなように、碧梧桐は南竹に好意を持っていない。もう少し正確に言えば、そのそつのない生き方(抜け目のない、と言つてもよい)に好意を持っていない。嫌っているのである。碧梧桐は子規の「俳人子規といふ本をお見たか」との問い掛けに「イヤまだ見ない。見るのがいやぢやから」と答えているが、実際にはすでに披見していた可能性はある。ただ色々な意味で「見るのがいや」な本であったことは間違いないであらう。

子規にも「まア見たくないな」と言わしめている。明治二十八年(一八九五)、別れに際して、子規はへ竹の窓南に秋の山近しの句を南竹に与えているが、子規が南竹に対してどのようなスタンスを持って接していたかは不明である。ただ、我々は『俳人子規』の「はしがき」で南竹が「諺に棺の蓋<sup>ふた</sup>をおはふて論定まると氏の真価は如何。これ俳諧史上の疑問なり」と発言しているのに対して、少なからぬ違和感を覚えたのであった。弟子、少なくとも「余不肖といへども氏に従うて俳諧を学ぶ八年」と語る弟子の、師に対する言葉としては疑問視せざるを得ないのである。碧梧桐が虚子から聞いたエピソードとしての「南海の南竹」なる自己紹介の言葉とどこかで通うように思われる。漱石に対して「南海(伊予)」を代

表する俳人であるかのごとき自己紹介をしたというのである。子規門ではチョットした話題になっていたのであらう。分を心得ることに疎かったということである。本人は好い気になっているが、皆からは「笑い」の対象にされてしまったということである。

碧梧桐は、『俳人子規』出版に纏わる事実の報告を死者である子規にしている。これは事実と思われるので耳を傾ける必要がある。南竹が『俳人子規』出版に当って動き出したのは子規の「初七日もすまない」うちだと指摘する。子規の送葬は、明治三十五年（一九〇二）九月二十一日。出棺時刻までに百五、六十名の参会者があったという（佐藤紅緑稿「子規翁終焉記」参照）。その中に松山の南竹もいたのであらう。『俳人子規』の原稿を携えて。南竹は、まず「金港堂」へ行った、と碧梧桐は報告している。この「金港堂」は、原亮三郎によって明治八年（一八七五）に創業された金港堂であらう。『少年界』『少女界』『文芸界』などの雑誌出版で知られていた。二葉亭四迷の『浮雲』を出版したのも金港堂である。高浜虚子も雑誌への寄稿者（執筆者）の一人である。少しく後のことになるが、これも子規門四天王の一人佐藤紅緑が明治三十六年（一九〇三）六月二十五日、『芭蕉論稿』を日本橋区本町三丁目十七番地の金港堂書籍株式会社（原亮一郎社長）より出版している。その金港堂では、子規

の死後「あまり早過ぎる」ということで「不審に思つてつき返した」という事実を伝えている。金港堂宛の手紙の中にも『俳人子規』と同意の「子規先生に侍して其教を聞くこと前後八年」との文言があったことも記している。「えらいもんだな」との碧梧桐の感想は、無論、皮肉の言である。

金港堂で断わられ、次に持っていったのが「新声社」。「新声社」は、「新潮社」の前身。明治二十九年（一八九六）、佐藤義亮によって創立され、雑誌「新声」を創刊している。小栗風葉などの小説も刊行した。明治三十三年（一九〇〇）八月二十五日発行の沼波瓊音著『俳諧音調論』が、この神田区錦町二丁目六番地の「新声社」（発行人は佐藤儀助）となっている。義亮と同一人物であらう）である。碧梧桐も「新声社」とはかわりが深く、『俳句評釈』はじめ何冊かの著作を出版している。それゆえ「新声社」の話すところでは云々」は、「新声社」の佐藤義亮（儀助）より碧梧桐が直接聞いた話と見て間違いないであらう。結論から言えば、新声社も断わったのである。金港堂は、南竹に何か胡散臭さを感じて道義的に断ったのであったが、新声社（佐藤義亮）の断りの理由はもっとシビアであった。「別に何の評論もしていない。彼の俳句、彼の歌、彼の新体詩、彼の文章、彼の小説、など、いふ欄を置いて、それに日本新聞やホト、ギスやを切り

張りしたものだ」と指摘したというのである。我々は、すでに『俳人子規』を概観したのであったが、この指摘は、まさしく正鵠を射たものであると首肯せざるを得ないのである。初の子規の俳句選集としての「子規俳句集」の成果にはわずかに見るべきものがあつたが、他の部分はあまりに安易、かつ粗雑に編まれ、執筆されているのである。南竹自身は「はしがき」において「俳諧和歌及び文章を随記せしもの積んで一小冊子をなす」と記していたが、実際には、忽卒の間に「日本新聞やホト、ギスやを切り張りした」としか思えない内容なのである。碧梧桐は、子規をして「馬鹿にしてるぢやないか」と言わしめているが、この感想は、南竹の姿勢に対する碧梧桐自身の感想にほかならないのである。

南竹の人間性を暴露しているのは、虚実をない交ぜにして子規の言葉として記している「どうも東京へ来たといふて、蜜柑の籠か何か持つて来たな、丁度お前も来ておいでとろう。アシの非常に苦しんだ日で、あの蜜柑が怪しいと思つたてい。あの時もういかんと見込んで早速原稿を書き出したのぢやな。人間もそれ位のことをやれば、慥にえらい一人ぢや」の部分である。恐らく子規の口吻が活写されているのであろう。子規のところに南竹が「蜜柑の籠」を持って訪れたのは事実と思われる。その時、碧梧桐も同席していたのである（そのことが、右

の言葉を書かしめることになつたのであろう）。それがいつだったかは定かでないが、子規をして「アシの非常に苦しんだ日で」と言わしめているので、明治三十五年（一九〇二）に入つた某日と見てよいのではなからうか。「あの蜜柑が怪しいと思つたてい。あの時もういかんと見込んで早速原稿を書き出したのぢやな」——これは子規の言葉ではあるものの、當時を回想しつつ、百パーセント碧梧桐の思いを綴っているのである。碧梧桐は、「蜜柑の籠」を持って子規を見舞つた南竹を、子規の病状を探りに来たと見做しているのである。そして、もうだめだ（余命いくばくもない）と判断したのであつたらうというのである。その結果、子規の死を見越して早速『俳人子規』の執筆に着手したのであろうと推測するのである。売れ行きを念頭に置いての傑作出版である。——明治三十五年（一九〇二）十一月二十日、これが白石南竹が編んだ最初の子規選集『俳人子規』の発売日である。百ヶ日をも迎えていないのである。門弟たちは悲しみに打ち拉がれている。そんな中であつてあまりにも段取りがよすぎるのである。碧梧桐の推測が首肯されるのも不思議ではあるまい。子規をして「人間もそれ位のことをやれば、慥にえらい一人ぢや」と言わしめているこの言葉、碧梧桐の南竹に対する限りない侮蔑の気持ちが入められているのである。

南竹の子規追悼句へ共に見し月にななしむ身となりぬ  
が、我々にもひどく空しく感じられる。

\*引用文には読み易さを考えて、私に適宜振り仮名、  
濁点を施してある。